

ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp



高島獣医科
富山東病院長
(富山市水橋小出)
今野 浩明

春から夏にかけて、けがをして来院する猫が増えてきます。交通事故に遭うこともありませんが、外に出て他の猫とけんかして帰ってくることもあるでしょう。

昔から「動物はなめて傷を治す」という俗説があります。様子を見ているうちに治療が遅れてしまい、傷が悪化してしまうことがよく見られます。動物は体が毛で覆われているため、傷が分かりづらいこともあり、手足が腫れてきたり、うみが出てきて初めて分かることもあります。特にかみ傷の場合、猫は鋭い歯を持つため、深部

猫の傷やうみ



治療中の猫。けがをしたら一刻も早く診察を受け、傷口を洗浄しよう

慢性化する前に洗浄

にまで菌が感染する危険性が高くなります。

実際に猫がけんかして来院するケースでは、受傷後1週間近く経過している例が少なくありません。

場合によっては1カ月以上たつてから来院することもあります。診察したときには皮膚が黒くなり広範囲に壊死している猫が多いです。早期であれば抗生物質の

よる傷口の清浄化によって、比較的大きな傷も治っていきま

すがと同時に、猫エイズウイルスや猫白血病ウイルスに感染すると、数カ月から数年後には体の免

疫が低下し、腫瘍ができたり、衰弱したりするリスクが高まります。私見ですが、猫は皮下組織がルーズなため、横方向に病変が拡大していく傾向が強いと思われる。

これから新たに猫を飼おうと思っている人には完全室内飼育をお勧めしたいですが、既に外で自由な生活を謳歌している猫ちゃんに室内飼育を強いるのは難しいと思います。大切なのは、けがをしたらできる限り早く動物病院に連れていき、診察を受けることです。

投与だけで治ることもあり

ます。

治療は、洗浄、排膿(うみを出す)、壊死組織の除去が必要になります。受傷後、時間がたち、傷が慢性化している場合には外科的切除が必要なものもありま

す。一般にはドレッシングやタンパク分解酵素などに